

## (今思うこと) 労働組合大阪支部、文芸誌「種子まく人」再刊時の感想文

種子まく人前号が発行されたのが昭和43年(1968)12月28日であるから、すでに6年の空白が流れたことになる。僕が、この雑誌の編集をになっていた頃のことは、現在の気持ちからいえば、もう10年ひと昔前のことのように感じられる。さて、この10年間に、何が起こり、時がどう流れていったか。僕の身の上にも、いろいろな変化があっただろうか。

現在では、妻あり、子供二人、ローンによる住宅ありで、なんとか平均的サラリーマンを、地で行っている向きがあるが、この雑誌が、長い間の空白をおいて、久しぶりに発行されることは、ほんとうに嬉しことだ。ただ、僕としては、昔の「種子まく人」は、あれで、一つのバックナンバーとしてくぎり、誌名を新たに、今の時代に、スタートしてほしかったと思う。

長い間、僕は何をしてきたかと自問すれば、情けないかな、何もなすことなく過ごしてきたようだ。勿論、表面的な体裁だけは、一応、整えたといおうか。

その中身といえば、恥ずかしながらと言いたいところ。とくに、最近は、会社の皆様との交際も、ほんの表面的なもので、僕自身としては、まことに悪いと思っています。ただ、現状では、自分の力のなさに寄ってくるころ、いろいろと仕方がないこともあると、自分に言いきかせて、いるのです。サラリーマン生活といえば、週末には、ギャンブルにかけ、日曜日には、マイカーでゴルフに行き、ウィークデーには、満員の電車にもまれながら、日経かスポニチを読み、昼休みにはコーヒーを飲み、帰宅途中で、同僚と適量の酒を飲む。そんな、平均的サラリーマン生活から、落ちこぼれている自分の生活に、ひと頃は、引け目をおぼえていたこともあります。しかし、昨今の時代の流れには、復古調というか、インフレの影響のためというか、会社と家を往復するだけの、ぼくのような生き方も、健康な人間の生き方のひとつとして、認められきつつあるのは、意を強くさせられます。僕の本当のところといえば、自分の手元の生活から、充実していきたいという、ただ、それだけのことなのです。世の中の進歩発展に貢献するために、社会生活としての、会社での仕事というものを、一番に考えていることは勿論ですが、その次には、自分の手元の生活を、大事にしたい。ただ、それだけなのです。現在のところ、それだけで手いっぱいなので、それ以上のことをするには、これから毎年の、春闘の結果にもよるのです。数年でも続けて、満願すれば、僕の生活も、物質的に関するかぎり、現在の人付き合いの悪さから、いつかは、脱却できるでしょうと、期待しています。

さて一方、この10年間ほどの間に、世の中が進歩したのかといえば、進歩したと断言できぬような情勢が、昨今の新聞紙面を読んでいると分かります。ノストラダムスの予言とかいうものが、真実味をおびて、語られていることから分かるように、世の中がここに来て、なにか空恐ろしいものに、感じられてきました。

物質から見れば、現代人類は、公害、資源の欠乏、南北問題、人口問題、地球の寒冷化などなど、数限りなく起こされてくる難問に、直面しています。ヨーロッパで長い間、積み上げられてきた、近代科学文明の所産が、思想から見れば、人々を真に幸福にするはずであった社会主義というものが、僕らには、訳の分からぬ、いろいろな矛盾を来している現実には直面しています。本当に、これで良いのかという反省を、僕ら一人一人の内面に突き付けているようです。

綿々と続いてきた近代ヨーロッパの科学文明、合理主義の精神というものに、あまりにも信頼しすぎた結果ではないか。もっと他にも、人類の生存に必要なものがあるのではないかと、いう思いを起こさせ左にしろ右にしろ、あまりにも外面的社会システムからの発想が、多すぎるようです。ソルジェニチンの提起した問題は、体制に対して、反体制をぶっつけたものでなく、ロシア大地に根付く、魂の祈りを吐露した、ただそれだけのことなのではないか。だが、芸術作品の多くが、そうであるように、人々の心に、強烈な印象を残して、今後は、ただ沈黙を守るのでしょうか。

僕にとっても、なすこともなく過ごされてきた、この10年を反省し、これからは、いろいろと深く考えるということを、自分に課して生きてゆきたい。

とは言っても、現実の自分の生活スタイルを、この先、何ものかに変化させうる年齢では、もはやありません。今まで僕の生きてきたスタイルを踏襲し、その中で、内面を充実していきたいと考えています。

会社に入社してから、もう17年。昔の人は、お国のために、何事かをなしとげた年齢に達していますが、僕としては、本当に、恥ずかしながらと云いたい気持ちでいっぱいの今日この頃です。企業というものは、利益追求のシステムにしかすぎないのかもしれないが、システムの中の一つの歯車として、書物を供給することによって、少しでも、人類の文化に貢献できるのは、うれしいかぎりです。率直に言って、そのように思います。

生きがいというものを、仕事のみを求める猛烈社員と、マイホームに求めるマイホームパパや、趣味にもとめる風流人などと、分けて考えるものでなく、生きてゆく全人格的なものに、求めねばならないのではないかと思います。そういう意味で、僕は、職場に生きがいを求め、家庭でも生きがいを求めて、自己研鑽を積みたいと思います。

「種子まく人」新号発行に際して、現在の心境を書いてみました。昭和49年(1974)39才、記す。